



心の

こどもみらい館開館15周年記念 共同機構研修会**「子どもの育ちに目を向けて、エピソードで保育を考えてみませんか」**

～保育園(所)・幼稚園の垣根を越えて～

今年度は、こどもみらい館開館15周年を記念し、保育園(所)・幼稚園の保育者が集い、保育について語り合う研修会を実施しました。一つのエピソードを紐解きながらグループで討議し、中京大学客員教授鯨岡峻先生にご講評いただきました。保育園(所)・幼稚園、公私の垣根を越えて、保育の中で大切にしたいものを一緒に考えることができる機会になりました。

エピソード「めんめ」

年少のR児は衝動的に動くことがあり、年長のY児の作ったものを壊してしまう。我慢しながらもそんなR児を「こらしめてやりたい」という思いのY児、そしてY児同様にR児に対して様々な思いを抱えている年長クラスの子どもたち。その姿を見ている担任が、年長の子どもたちとの話し合いの中で、思いを受け止めながら、R児へのかかわり方を考えていくというエピソードです。

グループ討議の柱としては・・・

Y児の思い、R児の思い、年長クラスの子どもたちの思い、担任の思いはどのようなものであったのかについて意見を出し合い、「大切にしたい子どもの心の育ち」と、「子どもの心の育ちを支えるために保育者として大切にすべきことは何なのか」ということを討議しました。

鯨岡先生からは・・・

「エピソードは『書く』ことも大事だが、人の書いたエピソードを『読む』ことも同じくらい大事であり、書き手は何を伝えたかったのかということを考えるようになる」ということや、「子どもの心に寄り添っている人にしか子どもの心の動きはわからない。そこをエピソードに書かないと、他の人にこの子はこういう思いだったのかと伝えられない。言葉にならない子どもの心の動きがある。保育者は、そこを掴んで保育している。だからそこをエピソードに書かないと、言ったこと、したことを書いただけでは、その子の本当の思いは分からない。そこに踏み込むのがエピソード記述の特徴である」というアドバイスをいただきました。

また、研修会のテーマを「子どもの育ちに目を向けて、エピソードで保育を考えてみませんか」としましたが、子どもの育ちだけではなく、子どもの「心」の育ちにというように「心」を入れることは大変重要であるご指摘いただきました。

参加した先生方からは・・・

他の園(所)の先生たちと子どもの気持ちや保育者のかかわりについて討議することができ、大変有意義な研修会であったという感想が多数ありました。

第15回 「みらいっこまつり」開催報告**平成26年12月12日(金)・13日(土)**

今年度は、こどもみらい館開館15周年を記念し、市民の皆様には「子育て川柳」を募集したところ、子育て真っ只中のお父さん、お母さんや祖父母の方々から沢山の川柳が寄せられました。子育ての楽しさ、喜び、苦労や悩みを詠んだもの、子どもの可愛らしさ、そして孫を思うおじいちゃん・おばあちゃんの温かい目線、またユニークな内容のものなど沢山ありました。2階ロビーの展示場所で立ち止まって読みながら微笑んでいる方や、時には大きな声で笑っておられる方もありました。

また、京都市保育園連盟「エアマットであそぼう」、京都市私立幼稚園協会「みらいっこわくわくコンサート」、京都市保育士会「わくわくステージ・みんなあつまれ」、京都市営保育所長会「赤ちゃんふれあいコーナー」、京都市立幼稚園長会「みんななかよしお楽しみ会」など、共同機構の各団体の皆様にも楽しいイベントを企画・運営していただきました。今年度は昨年度を500人上回る4,716人の来館者があり、大盛況に終わることができました。本当にありがとうございました。

平成26年度 特別研修

児童家庭課・保健医療課と合同

虐待の現状と予防～メカニズムの理解と対応～

講師 倉石 哲也 武庫川女子大学教授

虐待の実態としては、母親から受ける場合が多いのですが、親の精神疾患や、面前DV、また、詐病などで過剰に医療機関にかかるミュンヒハウゼン症候群、医療ネグレクト、揺さぶられ症候群など他にも様々な問題があります。加害親の多くは望まない妊娠で戸惑っています。胎動を感じたときには喜びではなく、危機感すら持っているようです。そのようなケースでは出産がゴールとなり、その後子育てに意欲がわかないなどの状況になってしまいます。被害児童の状態として明らかに判明するのは、打撲、骨折です。また、性化行動や非行、人の嫌がることをして危害を加える反応性愛着障害や反抗性挑戦障害、更に、重度気分調整不全障害など養育環境の問題が大きく影響しています。発達障害の子どもは虐待を受けるリスクが高く、特にADHDの子どもは大人から叱られやすく、社会的な抑圧や反感を受けやすい傾向があります。愛着障害の子どもの特徴は悪への憧れがあり、人の嫌がることをします。親自身も愛着障害で子どものときに虐待を受けている可能性もあり、これは脳幹にダメージを受けたことによる脳の問題であることを理解しておいてください。

虐待を重篤化させないためには、他機関と連携をとる前に組織の中で管理職を交えて判断機能がしっかりしているかが大事なポイントになります。ネットワークでは、アセスメントの徹底や情報収集で関係機関との緊張感をどう作るかが重要です。第三者に個人情報を提供してはならないとなっていますが、「協力要請に応じる場合」は個人情報保護法に違反することにならないということを確認し、虐待やその可能性のある場合には即時に対応することが求められます。

私が保護者支援をするときに特に大事にしていることは、「親は専門家よりも長い間子どもの状態を改善しようと試みてきた」「親が何をしようと、最初にどんな無分別に見えようと、親の行動には何らかの理由がある」ということです。「助けて」と言えない人たちを支えるスタンスに立てるかどうかが大事になってきます。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています。貸出要項へ
講義の詳細は、要録ページをご覧ください。要録ページへ

平成26年度 夜間講座

乳幼児期発達障害の基礎理解と具体的な関わり方

講師 竹田 契一 大阪医科大学LDセンター顧問

発達に問題を抱えている子どもは、保育園（所）・幼稚園でも様々なサインを出しています。年少・年中のときには、全体の発達段階が達していないことや個々の差も大きいことから、おおよそ大丈夫です。しかし、それが年長になっても続くようなことがあれば要注意です。そのままにしておくと、小学校に行く頃には問題が大きくなっていたり、もっと様々なところに問題を抱えることになってしまったりします。早く手をうつために、その子がどこでつまづいているのか、どういうことでパニックを起こすのかという理解をしっかりと持ち、適切にかかわって欲しいと思います。

子どもとかかわるときには、子どもが何を伝えようとしているのかを分かろうとすることが大切です。大人側に子どもを合わせるのではなく、大人が子どもに合わせ、しっかり応じるのが重要になります。そのためには、子どもの発達観を持ち、子どもを見る感度を高めてください。

「あの子たいへんやねん」と子ども自身が困った子であるかのように問題児扱いしてしまいがちです。そのようなかかわりが続くと、子どもは大きくなるにつれ「自分は一生懸命にやっているのに、どうして怒られるのだろう」という思いを持つようになってしまいます。子ども自身が困っている子なのだという捉えをして欲しいと思います。そして特性そのものは障害ではありません。特性がプラスに働けば素晴らしい才能になることもあります。「あいつ変や」と周りが障害をつくってしまっているのです。幼児期はほんとうに大変だと思います。でも変わっていくこともあります。偏見を持たないで欲しいと思います。

具体的なサインや特性とその事例、支援の方法等についてはこの紙面上では語りきれません。こどもみらい館のホームページの要録では具体例をあげながら詳しくまとめています。そちらをご覧ください。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています。貸出要項へ
講義の詳細は、要録ページをご覧ください。要録ページへ

子どもを育む喜びを感じ
親も育ち学べる取組を
進めます。
〔「子どもを共に育む
京都市民憲章」より〕



この印刷物が不要に
なれば「雑がみ」と
して古紙回収等へ！



発行日 平成27年1月19日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町601-1
Tel (075)254-5001 Fax (075)212-9909
URL <http://www.kodomomirai.or.jp>